

2009年 10月 13日

減る水需要、期待の7～9月も不振 2年連続赤字の宇治市水道

収益の85%が給水量収入だが…

19年度には5年ぶりに単年度収支5700万円の赤字決算に転落、20年度も7000万円の赤字を出し、繰越し利益余剰金のやり繰りでしのいでいる宇治市水道。年間収益の85%を各家庭への配水による給水量収益で賄っているが、21年度も期待した7～9月の水使用量は最も大きかった8月でも193万トンを前年よりさらに5万トン程度下回った。夏場の天候にも大きく左右される水需要だが、全国的な傾向と同様に宇治市でも「エコ節水」が完全に定着。加えて人口が下降状態に入り、今後も水需要の伸びは期待できず、独立採算制を敷いている水道事業会計だけに、収益回復の打開策を探っている。

市水道部によると、5年前との比較で夏場のピーク時の水使用量は月間10万トン前後落ち込んできたという。当時だと、年間給水収益としては29億9000万円を稼いでいたが、最近では29億円あまりと、9000万円程度落ち込み、「影響は大きい」としている。

水道会計の場合、残り15%を下水道の本管を敷設する場合に水道管の移設が発生することによる受託工事収益と、宅地開発による水道加入金収益があるが、下水工事は順調に進捗が図られ、安定した収益は得られているものの、加入金収益の方は20年度には1億6000万円と激減。18年度までは年間3～2億円ペースで入っていたといい、ピーク年からみれば50%近くにまで落ち込んできたという。市内では新たな住宅開発が可能な市街地の空きスペースがほとんど姿を消し、市の水道の台所事情にも影響を与えている。

一方、水道料金は11年前に府営水道料金と前後するかたちで現行料金に改定以降、据え置きしている。8年前に府営宇治浄水場の導水管事故による大規模断水などもあり、この間、料金改定の環境も整わず見送ってきた経過もある。長期の不況下、改定は市民の台所を直撃するだけに、慎重な対応が求められ、現在策定を急いでいる水道ビジョンのなかでも、将来の水需要を充分見定めた施設のあり方や無駄の点検を実施している。